

カフカの『流刑地にて』(1)

—「書くこと」の否定—

佐々木 博 康*

【要 旨】 本稿は、伝記的事実も参照しながら、カフカの『流刑地にて』を作者の内面のドラマとして解釈するものである。残酷な処刑機械はカフカのペンであり、12時間かかる処刑過程は「書くこと」の過程である。処刑を実行する士官も、処刑される囚人もともにカフカの分身である。このことが意味するのは、カフカにとって「書くこと」が自己処刑であるということである。それはカフカが子供時代に父親——物語では旧司令官——から受けた心理的圧迫によるトラウマを反映している。一方、カフカのロールモデルともなりうるポジティブな父親像が新司令官である。処刑を視察する研究旅行者もカフカの分身であるが、カフカの「書くこと」自体を客観的に評価するために導入された第三者的存在である。

【キーワード】 自己処刑 ト라우マ 〈父—息子〉関係

はじめに

まず最初に、カフカの『流刑地にて』(以下、『流刑地』)が、いつどのような状況で書かれたのかを確認しておこう。

1912年9月20日、カフカは、友人マックス・ブローツの家で知り合ったフェリーツェ・パウアーに手紙を書く。こうして二人の間に文通が始まる。紆余曲折——結婚に対するカフカの抵抗がその主な原因——を経て、1914年4月には婚約が決まる。6月1日にはベルリンのフェリーツェの家で、両家の家族も交えて正式な婚約祝いが催される。しかし、それから一月半にもならない7月12日、二人の関係は突然の破局を迎える。ベルリンのホテル、アスカーニッシャー・ホーフで、フェリーツェの友人グレーテ・ブロッホ、フェリーツェの妹エルナが立ち会う中で、フェリーツェがカフカを激しく糾弾したのである。そのさいフェリーツェは、カフカがグレーテに宛てて書いた手紙を動かさない証拠として突きつけている。その手紙が残っていないので詳細ははっきりしないのであるが、婚約したにもかかわらず、そのことで喜びを覚えるどころか、「重大な過ち」²⁾とみなし深く絶望しているカフカの気持ちが吐露されていたものと推測されている。こうして婚約は解消される。

休暇を過ごしてプラハに戻ったカフカは、8月11日ごろから第二の長編『訴訟』を書き始め

る。最初はすさまじい勢いで執筆が進むが、9月に入って滞り始める。長編を書き進めるために、カフカは10月5日から18日にかけて休暇を取る。しかし、結局この二週間で書かれたのは『訴訟』ではなく、『流刑地』と最初の長編『失踪者』の章の一つだった。

その後、10月末にフェリーツェが連絡を寄こしてきて、二人の間に文通が復活する。翌1915年の1月には再び彼女と会っている。1916年には二人は保養地マリーエンバートで一時的に共同生活を試みたりもしている。そして1917年7月、カフカはフェリーツェと二度目の婚約をするのだが、その直後の8月、咯血し、肺結核と診断される。そのため12月には二度目の婚約も解消となる。

以上のように、『流刑地』は、フェリーツェとの婚約が破綻し、二人の関係が再開されるまでの間の時期に書かれている。まず長編『訴訟』が執筆され、その行きづまりの中で『流刑地』が一気に成立している。

次に、『流刑地』の内容を見てみよう。

流刑地の島を訪問中の研究旅行者が当地の死刑執行に立ち会う。処刑を行うのはほとんど自動で動く機械である。この機械は、12時間かけて針で被処刑者の体に、「上官を敬え！」という判決文を刻み込み、最後に太い鉄の針で刺し殺す。機械を操作する士官によれば、流刑地の裁判制度と処刑機械を作り上げたのは今は亡き旧司令官である。士官は、この裁判制度と処刑機械を支持しているのはもう自分だけであり、新しい司令官はそれを廃止する機会をうかがっていると言う。そして旅行者に、新司令官のもくろみを阻止するために協力してほしいと懇願する。旅行者が助力を拒むと、士官は処刑機械の中に入れられていた囚人を引っ張り出し、「公正であれ！」という判決文をセットすると、自ら機械に横たわる。ところが、機械は正常に機能せず自壊し始め、通常より早く士官を刺し貫いてしまう。その後、旅行者は囚人と見張りの兵士とともに町に戻り、そこで茶店に立ち寄る。茶店の奥には旧司令官の墓石があり、そこには彼の復活と再支配の予言が刻印されている。それを読んだ旅行者はすぐに港に向かい島を離れる。

後味の悪い物語である。カフカの作品の中でも、もっとも残酷でグロテスクな作品であると言えるだろう。執筆から2年後の1916年12月10日にミュンヘンで公開朗読——フェリーツェも聞いていた——したときに不評だった³⁾のも、またそれから3年後に単行本として出版されたときの批評のほとんどが否定的だった⁴⁾のも当然かと思われる。当時の批評家の一人は、この物語には「おぞましさ」を感じると述べ、「ただ吐き気を呼び起こすだけ」であると切り捨てている⁵⁾。いったいこの物語は何を描いたものなのだろうか。

作品の解釈としてもっとも説得力があるのは、ハンス・ディーター・ツィーマーマン(1994)の解釈⁶⁾だろう。ツィーマーマンはこの物語を、『流刑地』執筆の数ヶ月前に勃発した第一次世界大戦と関連させている。ツィーマーマンによれば、第一次世界大戦は飛行機、戦車、潜水艦などの「巨大な殺害機械」⁷⁾を初めて駆使した戦争であり、洗練された技術で造られた機械が人間を苦しめ殺戮した。そこで支配しているのは、「罪はいつも疑いのないものである」(212)⁸⁾という『流刑地』の士官が信奉する理不尽な原則と同じものであり、誰もが一律に殺害機械にかけられる。つまり、ツィーマーマンにとって『流刑地』は、第一次世界大戦の「最高度に凝縮された、技術的合理性と野蛮な非人道性」⁹⁾を描いたものなのである。また、そのような状況

に向き合う人間の態度もテーマになっているとされる。「平均的ヨーロッパ人」¹⁰⁾である『流刑地』の旅行者は、残酷な機械や前近代的な裁判手続きに対して否定的な思いを抱くが、外部の人間であるとして、自分の考えを表明するのをさんざんためらう。この点についてツィーマーマンは、戦争を阻止する力を持ち得ない、ヨーロッパの人道主義のひ弱さと機能不全が示されていると主張する。

ツィーマーマンの解釈は、『流刑地』を現実社会の反映とみるものであるが、このような解釈の萌芽はすでにハインツ・ポリツァー（1962）やヴァルター・H・ゾーケル（1964）にも見られる¹¹⁾。ただ、第一次世界大戦と結びつけることで明確な形で展開したのがツィーマーマンである。ペーター＝アンドレ・アルト（2005）¹²⁾もツィーマーマンの解釈を受けついでいる。

しかし、ツィーマーマンも認めているが、このような解釈によっても、なぜ処刑が被処刑者の体に判決文を書き込む形をとるのかなどを始めとして、さまざまな疑問がどうしても残る。

出版者のクルト・ヴォルフは、カフカへの手紙で、この物語について、「やりきれないもの」という言葉を使った。以下は、それに対するカフカの返信である。

やりきれないもの（**das Peinliche**）というあなたのお言葉は、私の意見とまったく一致しています。（……）この最近の物語（＝『流刑地』）については説明のためにただ次のことを付け加えさせてください。つまり、やりきれないのはこの物語だけではないということ、むしろ私たちの時代一般がそうなのであり、また同様に私の特別の時期がかつてとてもやりきれないものだったのであり、今もそうなのだということ、そして私のやりきれなさのほうに時代一般のそれよりももっと長く続いているということ。 ¹³⁾

つまり、カフカは、この物語に「時代一般」が影響を与えていることを認めると同時に、「私の特別な時期」という言葉が示すように、自分の個人的な問題も深く関与していると述べているのである。

「時代一般」と「私の特別な時期」とが具体的に何を指しているのかは、1914年9月13日のカフカの日記からわかる。

戦争に結びつく思考は、ぼくを四方八方に引き裂く責め苦であるという点で、**F**（＝フェリーツェ）のために生まれたかつての憂慮（**Sorgen**）に似ている。ぼくは憂慮に耐えることができない。ひょっとしたら憂慮で破滅するようにできているのかもしれない。 ¹⁴⁾

カフカは、第一次世界大戦がもたらす苦痛と、かつてフェリーツェと関わることで生まれた「憂慮」を結びつけている。

このように、『流刑地』は、時代の痛みを反映したものであるばかりでなく、カフカ個人の痛みも強く反映した複合的な作品である。物語を時代と関連づけるとき、ツィーマーマンのような社会的な解釈が可能になる。では、この物語を作者の人生の反映とみるなら、どのように解釈できるだろうか。

本稿では、このような観点から、『流刑地』にはカフカのどのような人生上の問題が示されているのかを、伝記的事実も参考にしながら明らかにしていく。

1. 処刑と「書くこと」

カフカ自身の人生と関連させて物語を解釈しようとする者にとっては、処刑機械や処刑過程は明らかにカフカの「書くこと」と結びつく。すでにポリツァー（1962）が、機械のイメージは「文学のイメージとしても理解されうる」と述べ、それは「書くことの苦しみ」を表現しており、「カフカが書くときに自分をさらしていた拷問」¹⁵⁾のことであるとしている。また、デトレフ・クレマー（1989）¹⁶⁾は処刑機械とタイプライター（Schreibmaschine）との類似性に言及している。ただ、処刑機械は Schreibmaschine ではなく——カフカはタイプライターを使うことはほとんどなかった——，Schriftmaschine（書字機械）であるとし、やはりカフカの「書くこと」の具現化であり、「書くことが拷問であるということ」¹⁷⁾を表していると述べている。マーク・アンダーソン（1992）¹⁸⁾は、処刑過程を『判決』執筆と結びつけ、「カフカが『判決』を書いていくさまと、『流刑地にて』で「判決文」と「装飾文様」が書き込まれていくさまとは、何とよく似ていることだろう」¹⁹⁾と語っている。アルト（2005）も、「テキストが描く機械は、文書と死との一体性を、エクスタシーとタナトスとの一体性（……）を示している」²⁰⁾と述べている。

このように、多くの研究者が、処刑機械や処刑過程とカフカの「書くこと」との関連に言及している。実際、処刑機械が「書くこと」を連想させる要素は多々ある。体に判決文を刻みつける処刑機械の「馬鋏（Egge）」は「文字を書き込む針（die schreibenden Nadeln）」を持っている。これは明らかにペンである。被処刑者は「ベッド」と呼ばれる部分に寝かせられるが、このことは、『流刑地』の2年前に書かれた『変身』の発想をカフカが得たのがベッドの中だった²¹⁾ことを思い起こさせる。被処刑者の体に刻みつけられる判決文は、カフカの書いた作品を表しているだろう。判決文そのものは「上官を敬え」や「公正であれ」のように単純なものであるが、無数の装飾文様に取り巻かれている。ポリツァーは図案の文字を「カフカ自身の手書き文字の正確な記述」²²⁾であるとし、アンダーソンは装飾文様を「カフカ自身の物語の文学的比喩」²³⁾であるとしている。旅行者は士官が見せてくれる図案を解釈しようとするがどうしてもできない。それは、装飾文様で囲まれた判決文が実用的文章ではなく、文学的文章だからである。

また、処刑機械に対する士官のフェティッシュな執着は、「書くこと」へのカフカの強い思い入れと重なる。「書くこと」は文学の別名であるが、カフカは文学を「僕の唯一の欲求（Verlangen）」、「僕の唯一の仕事（Beruf）」と呼び、「僕は文学以外の何ものでもないし、文学以外の何ものでもありえないし、またありたくもない」²⁴⁾とまで記している。処刑機械をひたすら賛美し、最後はその機械の中で死んでしまう士官は、文学＝「書くこと」に殉じようとしているカフカその人である。

では囚人は誰をモデルにしているのだろうか。カフカは、1920年10月、当時の恋人ミレナ・イエセンズカーに送った手紙に自筆のペン画（次ページの図²⁵⁾参照）を同封し、「書くこと」が自分にとってどういうことなのかを説明している。

僕の「仕事」（＝「書くこと」）のことがわかるように、イラストを添付する。四本の支柱があって、内側の二本の穴に棒が通してある。「罪人」の両手がその棒に固定されている。外側にある二本の支柱には両足用の棒が通っている。男が固定されると、棒はゆっくりと

外に開いていって、しまいには男はまん中で裂けてしまう。柱に発明者が寄りかかり、腕組みをし、脚を組み合わせて、自分の独創的な発明であるかのように威張っている。実際には彼は、臓物を取り出した豚を店先に広げている肉屋の真似をただけなんだ。²⁶⁾

残酷な描写であるが、「発明者」と「罪人」の構図は、『流刑地』の士官と囚人のそれに酷似している。数日後に同じくミレナに宛てて書いた手紙ではもっとはっきりと、「そうだよ、拷問はぼくにはきわめて重要だ。ぼくがたずさわっているのは、まさに拷問されることと拷問することなんだ」²⁷⁾と述べている。つまり、『流刑地』の処刑を執行する士官だけでなく、処刑される囚人もまたカフカの分身であると言えるだろう。カフカにとって「書くこと」とは、自分で自分を拷問し、処刑することなのである。

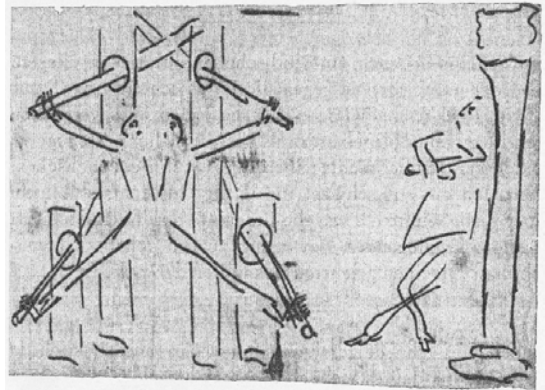


図 カフカのペン画

2. 奇妙な処刑

このように処刑をカフカの「書くこと」と結びつけて考えるとき、処刑過程における不可解な多くの事柄の意味も明らかになってくる。

処刑過程を詳しく見てみよう。処刑機械は、台にうつ伏せに横たわった被処刑者の体に、12時間かけて判決文を刻み込む。ベッドの頭部には「電気保温ボウル」(219)が置かれており、被処刑者は処刑中好きなだけ「温かい粥」(ebd.)を食べることができる。ところが6時間経つと、被処刑者の「食べることへの喜び」(ebd.)は失われ、大きな変容が起こる。

しかし、六時間を過ぎたときには被処刑者はなんと静かになっていることでしょう！ どんなに愚かな者にも理性が目覚めます。目の周りからそれが始まります。そこから広がっていきます。眺めていると、自分も一緒に馬鋏の下に横たわりたいという気持ちになります。それ以上は何も起こりません。被処刑者が文字を解読し始めるだけです。耳を澄ませているかのように口を尖らせます。あなたもご覧になったように、文字を目で解読するのは簡単ではありません。しかし、我々の被処刑者は自分の傷によってそれを解読します。もちろんそれは大変な仕事です。それを終えるのに六時間が必要なのです。(219f.)

判決文の解読を終えると、被処刑者は馬鋏の針に刺し貫かれる。馬鋏は死体を穴の中に投げ捨てる。

12時間かかる処刑、処刑中の食事、6時間目の転回点、食欲の減退と「理性」の目覚め、判決文の解読と、奇妙なことばかりである。これらはどういう意味なのだろうか。

まず、死刑の執行になぜ12時間という長い時間をかけるのかという点である。単なる死刑執行ならば12時間も時間をかける必要はない。処刑は早ければ早いほどいいはずである。

これについては、12 時間という時間には、カフカが事実上の処女作である『判決』を書くのに要した一晚という時間が反映されているとするアンダーソンの見解²⁸⁾が正鵠を射ているだろう。つまり、処刑が長くかかるのは、それが執筆に要する時間だからである。

6 時間目の転回点もまた、『判決』執筆と関連していると考えられる。『判決』は 1912 年 9 月 22 日の夜 10 時から翌朝 6 時までの 8 時間で一気に書き上げられた作品であり、カフカにとって「書くこと」の範例となった作品である。カフカは執筆時の状況を日記に次のように記している。

窓の外が青くなった。馬車が一台通った。男たちが二人橋の上を歩いていった。時計を見たのは二時が最後だった。女中が初めて控えの間を通過していったとき、ぼくは最後の一文を書いていた。²⁹⁾

カフカが時計を見た未明の 2 時という時刻は、夜の 10 時から翌朝の 6 時までの 8 時間においてちょうど中間となる時刻である。カフカは 2 時までは、窓の外のようにすを意識し、馬車が通り、男たちが橋を渡っていくのを見ている。時計にも目を向けている。ところが、2 時以降、朝になって女中が動き出すまでは、何にも言及されていない。この時間、カフカは一心不乱に『判決』を書き続けていたのである。『流刑地』の処刑時間が 12 時間であるのに対して、『判決』執筆に要した時間が 8 時間であるという違いはあるにしても、中間時点から変化が生じるという点では共通している。6 時間目の転回点とは、カフカが執筆に没頭し、自分の作品世界に没入したときを表している。

では、粥を食べることにはどういう意味があるのだろうか。死刑囚が刑の執行前取る最後の食事 (Henkersmahlzeit) のパロディのようだが、それだけではないだろう。カフカは生と芸術の対立をしばしば「食べること」と「書くこと」の対立として表現した。「食べること」＝生の享楽を放棄した果てにしか、「書くこと」による芸術的成果は得られないという強い確信をカフカは抱いていた。『変身』のグレゴール、『断食芸人』の断食芸人、『探究』の探究犬など、カフカが本来の自己を投影した主人公はみな断食へと向かう。『流刑地』の被処刑者は、「食べることの喜び」を失うとき「理性」が目覚めると言われている。物語の別のところでは、「苦しみ」に満ちた顔から浄化の表情が現れ、「救済のしるし」が見て取れるとも表現されている。ここで持ち出される言葉、「理性」、「浄化」、「救済」は、「食べること」を離れたときに得られる報酬である。それは、「書くこと」への没入による極限的な喜びを表している。

ここで思い出されるのは、『判決』という自分でも納得できる作品を初めて書くことができたカフカの興奮に満ちた感想である。

恐ろしいほどの緊張と喜び。物語がぼくの前で展開していった。水の中を進んでいくように。(……) どんなことも語られうるのだということ、どんな着想にも、どんなによそよそしい着想にも、大きな火が用意されていて、その中でそれらの着想は消滅し、またよみがえるのだということ。³⁰⁾

「書くこと」がどのようなことなのかを初めて体感したカフカの喜びがあふれている。「書くこと」は自己処刑であるが、それは苦しみだけを与えるものではない。大きな喜びをもたらす

ものでもある。「水の中を進んでいくように」どんどん書き進んでいったカフカは、夜の半ばを過ぎて一種のトランス状態に入ったのである。

「理性」が目覚めた被処刑者が始めるのは、自身の身体に刻まれつつある判決文の解読である。これがどういうことかを理解するためには、カフカの執筆の仕方について知る必要がある。カフカは事前に想を練り構成を考えて書く作家ではなかった。書くことへの強い衝動が生まれたとき、無意識の心理状態で憑かれたように書き続けるのがカフカの手法である。何を書こうとしているのか自分でもわかっていない。夢中で書き続けているうちに、心の奥に潜んでいたものが表面に現れてくる。書きたかったことの核心が自分自身にも体得されてくる。見えなかった自身の生の問題が浮かび上がってくるのである³¹⁾。被処刑者の「解読」はそのことを示しているだろう。ただ、「自分の傷によって」解読すると言われている点には痛々しさが感じられる。

以上、流刑地における士官による囚人の処刑が、カフカにとっての「書くこと」を表現したものであることを見てきた。しかし、喜びもあるとはいえ、「書くこと」はなぜこのような苦しい拷問の果ての処刑としてイメージされなければならないのだろうか。このことを理解するためには、旧司令官、士官、囚人の関係を伝記的関連から考察する必要がある。

3. 旧司令官

伝記的に見れば、旧司令官は明らかにカフカの父親を反映している。処刑機械を発明し、裁判制度をほとんど独力で整えたのは、亡くなった旧司令官である。士官は「流刑地の設備全部が彼の仕事であると申しまして言い過ぎにはならないでしょう」と言う。旧司令官が達成した偉業は、貧しい行商人から身を起こし、プラハの中心部に高級装飾品店を構えるまでに至ったカフカの父親の社会的成功に通じるところがある。また、旧司令官は士官にとって精神的支柱となっているが、カフカにとっても父親は絶対的存在だった。『父への手紙』でカフカは、「あなたは僕にとって万物の尺度でした」³²⁾と述べている。旧司令官に対して士官が崇敬の念を抱くように、カフカは成功者として自信にあふれる父親に「まばゆいばかり」の輝きを見ている。

あなたは自分の力だけで努力を重ね、そんなにも高い地位に登りつめられました。それゆえ、自分の考えに無限の信頼を抱いておられました。それは子供の僕にとってというよりは、むしろ大人になりつつある青年にとって、まばゆいばかり (blendend) のことでした。あなたは肘掛け椅子に座って世界を統率しておられました。³³⁾

ただ、子供のカフカは父親を崇めてばかりいたわけではない。むしろ、父親に恐怖を感じ怯えていることのほうがはるかに多かった。ところが、『流刑地』における旧司令官と士官の関係には、父親と息子のこのような側面はまったく見られない。それはどうなっているのだろうか。

『父への手紙』においてカフカは、父親がいかにも暴君であったか、そしてその前で自分がどんなに圧迫と恐怖を感じていたかを縷々述べている。

しかし子供の僕にとっては、あなたに怒鳴りつけられたすべてのことが、まさに天の至上命令 (Himmelsgebot) でした。僕はそれを忘れることは決してありませんでした。それ

は僕にとって世界を判断するための（……）もっとも重要な手段となりました。³⁴⁾

（……）僕にとって世界は三分されました。一つは、奴隷である僕が生きている世界で、僕のためだけに考案され、どういうわけか、決して完全には従うことのできない法（Gesetze）に支配された世界です。³⁵⁾

カフカは、子供時代の自分が威圧的な父親の下で、その言葉を「天の至上命令」と受け取らざるを得なかったと述べ、自分が「奴隷」として、「僕だけのために考案され、どういうわけか、決して完全には従うことのできない法に支配され」て生きてきたと語っている。『流刑地』の囚人は、深夜に上官の部屋の前で敬礼するのを怠ったという馬鹿げた罪で起訴され、「罪はいつも疑いのないものである」という原則に従って有罪とされ、さらにその体に彼が破った「規則（Gebot）」である「上官を敬え（ehre deinen Vorgesetzten）」という文字が刻まれる。このような、日常的常識ではありえない司法制度はつまり、子供のカフカの目に映った父親による「法」の支配の世界が戯画化されたものなのである。「法」はいかに不条理なものであっても絶対に従わなければならない。〈父－息子〉関係におけるこのような権力の絶対性の原理を端的に表現しているのが、「上官を敬え」という判決文なのである³⁶⁾。

すでに前節で、士官も囚人もカフカの分身であることを確認した。より正確に言うなら、士官は、父親の言動の数々を通じて権力というものがこの世界を支配する絶対的な原理であることを、骨身に刻み込まされてきたカフカであり、囚人は父の「法」に「決して完全には従うことのでき」なかった子供時代のカフカなのである。士官による囚人の処刑とは、父の意にかなう息子たりえない自分を自らが責める行為、自己断罪である。旧司令官、士官、囚人という旧体制の人物配置で示されているのは、このような〈父－息子〉関係によるカフカのトラウマである。

ところで士官による囚人の処刑は、カフカにとって「書くこと」を意味していた。処刑と「書くこと」のつながりはどうなっているのだろうか。上で見たように、カフカにとって父親の言葉は「天の至上命令」であり、それはカフカにとって、「万物の尺度」、「世界を判断するためのもっとも重要な手段」となった。法がいかに不可解であろうとそれには無条件に従わなければならないという権力の絶対性の原理が、カフカが世界を見るときの基本となったのである。カフカの文学は、まさに人間関係における権力の問題を表現するものである。『判決』や『変身』のような短編小説では家族間の重苦しい権力関係が、長編小説においては官僚組織などの社会システムと個人の間の権力的軋轢が執拗に描かれる。つまり、カフカは子供の自分が体験したことを、「書くこと」によって反復しているのである。

1920年のミレナ宛の手紙で、カフカは『判決』について次のように述べている。

あの物語（＝『判決』）では、一文一文が、一語一語が——そしてこう言ってよければ——音楽の一つ一つが、〈不安〉と関連しています。当時、長い夜に、傷（die Wunde）が初めて開いたのです。³⁷⁾

「傷」の原語は die Wunde であり、定冠詞がついている。何らかの一つの傷、eine Wunde ではなく、特定の傷を指している。それは子供時代のカフカが受けた傷である。カフカにとつ

て「書くこと」とは、この傷の顕在化である。自身の傷を「書くこと」で外在化し、客観化する。「書くこと」が拷問の末の処刑という極度の苦しみ満ちた行為なのは、それが自分の傷を露わにすることだからである。「傷が初めて開いた」の「初めて」という言葉が示しているように、『判決』にとどまらず、すべての書かれたものがカフカにとって顕在化された「傷」であると言える。カフカが夜ごとに行っているのは、子供時代の傷の反復行為であり、それはいわばトラウマを抱える人が自らのトラウマ体験を疑似的に繰り返すことで苦しみから逃れようとするのに似ている。

すでに見たように、「書くこと」は拷問と処刑として苦痛だけを与えるものではなく、喜びを与えるものでもあった。処刑から6時間を経た被処刑者の表情は、処刑を執行する士官が「自分も一緒に馬鐮の下に横たわりたいという気持ち」になるほどの陶酔状態へと変わる。被処刑者に「理性」が目覚め、判決文を「解説」し始める。心の傷が潜在している限り、「不安」を呼び起こすだけであるが、傷が外在化され、「理性」によって「解説」されるとき、それは「救済」となる。書かれたものがどんなに苦痛に満ちたイメージで占められていようと、客観化されることで無意識的な不安は解消され、一時的な安らぎを得られるのである。この意味では、〈父一息子〉関係が子供のカフカに与えた傷が、「書くこと」の動因ともなっているとも言える。〈父一息子〉関係と「書くこと」は、独特な共依存関係にあるのである。

4. 新司令官と旅行者

次に新司令官について見てみよう。新司令官は物語には直接登場しない。士官の長広舌において言及されるだけである。士官にとっては敵対者なので、奸智に長けた否定的な人物として語られる。しかし、士官の色眼鏡をはずして冷静に見るなら、新司令官が必ずしも悪意に満ちた人物であるとは言えないことがわかる。

新司令官は、旧司令官が作り上げた、流刑地の前近代的な裁判制度を改めようと考えており、近代ヨーロッパ的価値観とも合致するリベラルな体制を作り上げようとしている。これまで処刑機械の維持に関わる予算を削減してきており、最終的には機械自体を廃棄しようとしているようである。ただ、それを行うに当たって、有無を言わせぬ上からの命令によるのではなく、会議での議論を尊重しようとしている。会議には反対派の士官さえ出席を認められている。広い視野を持った研究旅行者の意見を聞き、流刑地の住民の賛同も得ようと努めている。旧体制を支配していた絶対的な権力的ヒエラルヒーと比べると、新体制はとても民主的である。また、新司令官は強い意欲をもって「港湾施設」(233)の建設を推し進めているが、港は外の世界との交流をもたらす基盤設備である。新司令官が閉ざされた流刑地を外の世界に向かって開き、島を開放して発展させようとしていることがわかる。このように、新司令官は旧司令官とは対蹠的な存在である。旧司令官が強権的、専横、閉鎖的であるのに対して、新司令官はリベラル、民主的、開放的である。客観的に見れば、意欲的に改革に取り組み、しかも確かな実績を上げつつある有能なリーダーであると言えるだろう。

新司令官は女性たちに取り巻かれている。士官は彼女たちについても、新司令官に影響を及ぼし物事をゆがめる存在として否定的に語るのだが、処刑される囚人にハンカチを贈ったり、砂糖菓子を与えたりと、同情とやさしさに満ちていると解することもできる。粥しか提供されない禁欲的な処刑場とは対照的である。新司令官の世界には女性的柔和さが備わっており、男

性的厳しさが支配する旧司令官や士官の世界とは異なっている。

このように、新司令官は一般的な意味で男性にとっての理想像であり、女性にとっては好ましい男性像となっている。つまり、新司令官はカフカにとって、自身の社会的存在としての側面を十全に展開して生きた場合の一つの理想的形姿なのである。旧司令官という現実の父親に拮抗しうる、カフカのロールモデルとしての理想的父親なのである。

それは、フェリーツェにとっても好ましい男性である。カフカは、アスカーニッシャー・ホーフの件から3ヶ月以上経って書いた彼女宛の手紙で、次のように述べている。

僕の中には互いに戦っている二人の人物がこれまでいたし、今もいる。一人はほとんど君が望むような人物で、君の望みを満たすのに欠けているところは、彼のこれからの成長によって達成することができるだろう。アスカーニッシャー・ホーフでの君の非難は一つも彼には当たらなかった。しかしもう一人は、ただ仕事（die Arbeit）のことだけを考えている。それが彼の唯一の心配事なんだ。³⁸⁾

カフカにとって第一の自己とは、後半で述べられた「ただ仕事のことだけを考えている」自己である。「仕事」とは労働者災害保険局での仕事ではなく、「それだけが僕に生きる権利を与える僕の仕事」³⁹⁾とも呼ばれる「書くこと」である。つまり、第一の自己とは作家カフカである。それに対して第二の自己とは、「ほとんど君が望むような人物」、すなわち社会的存在としての自己である。この第二の自己が「これからの成長」を遂げ、世間一般の人々が賞賛するような男性となったのが新司令官である。

最後にこの物語の主人公である研究旅行者について見ておこう。旅行者は士官とは対照的な人物である。士官は歪みを持っている。非人道的な裁判制度に何の疑問も持たず、処刑機械に過剰な愛を注いでいる。新司令官に対する見方も一方的である。自分の関心事である処刑機械の維持という点からのみすべてを評価しており、極度に主観的である。それに対して旅行者は慎重で客観的である。物事を性急に判断するのではなく、距離を置いてじっくり見てから判断しようとしている。世界各地を旅し、さまざまな価値観の世界に触れている。自分が訪れる場所の制度にはなるべく介入するべきでないと考えるなど、異質な価値観を尊重しようとする価値相対論的な考えを持っている。

旅行者は士官とは対照的だが、新司令官とは共通性がある。旧体制の野蛮な死刑制度に対して両者とも批判的である。ともに被処刑者の人権を尊重しようとする近代ヨーロッパ的価値観を持っている。死刑囚に対する女性たちの同情に示されているように、彼らが生きているのはヒューマニズムが通用する世界である。旧司令官や士官、そして囚人といった異様な人物たちと比べると、新司令官や旅行者の考え方や行動の仕方は、読者にもある程度納得のいく、健全で、合理的で、常識的なものである。

このように見てくると、旅行者はカフカのもう一つの自己、社会的自己であることがわかる。フェリーツェが「望むような人物」である。ただ、新司令官のように特定の社会的現実に関与し、現実を動かし、社会的評価を得るという方向で生きているわけではない。物語においては——少なくとも当初は——あくまで客観的な観察者にとどまっている。考え方としては新司令官と共通しているが、行動する人間ではないのである。

これまでの研究では、すさまじい処刑機械や強烈な個性を放つ士官にばかり大きな注意が向

けられ、旅行者は処刑機械と士官の死を見届ける、単なる報告者程度としか捉えられてこなかった。処刑機械や士官を本来の主人公であると見なす研究者⁴⁰⁾は多い。しかし、旅行者は、物語の視点を担う人物、視点人物である、物語で人間的变化を遂げている、物語の最後まで登場しているなどの点から、明らかにこの物語の主人公である。以下では、旅行者に光を当てて、物語が何を描いているのかを見ていく。

注

- 1) 以前はカフカの友人エルンスト・ヴァイスも同席していたと考えられていたが、彼はいなかった。Alt, Peter-André: *Franz Kafka. Der ewige Sohn, eine Biographie*. München 2005, S. 381 参照。
- 2) Ebd.
- 3) Born, Jürgen (Hg.): *Franz Kafka. Kritik und Rezeption zu seinen Lebzeiten 1912-1924*. Frankfurt a. M. 1979. S. 117-123.
- 4) ユルゲン・ボルンによれば、「ほとんどすべての書評家が(……)否定的な判断をした」(Born, a. a. O., S. 93)。唯一高く評価したのがクルト・トゥホルスキーである。Born, a. a. O., S. 93-96 参照。
- 5) Born, a. a. O., S. 97.
- 6) Zimmermann, Hans Dieter: In der Strafkolonie – Die Täter und die Untätigen. In: Michael Müller (Hrsg.): *Franz Kafka. Romane und Erzählungen*. Stuttgart 2009 [1994, 2003], S. 158-172.
- 7) Ebd., S. 166.
- 8) 『流刑地』からの引用は、Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt a. M. 1994 による。本書からの引用は本文中に頁数のみを挙げて示す。なお、訳は拙訳である。
- 9) Ebd., S. 167.
- 10) Ebd., S. 165.
- 11) ハインツ・ポリツァーは、処刑機械を、「第一次世界大戦の勃発とともにヨーロッパの意識に入り込んできた非人間化」(174)を、普通に理解できるようなイメージでまとめた「象徴」(ebd.)であるとしている。旅行者については、「啓蒙の限界」(184)を知っている人間であり、最後には「無定見さ」と「非人間性」(ebd.)が露わにされるとしている。(Politzer, Heinz: *Franz Kafka. Der Künstler*. Frankfurt a. M. 1978 [1962], bes. S. 166-190.) また、ヴァルター・H・ゾーケルは、『流刑地』が「まさに勃興しつつある非合理主義的で全体主義的な時代の本質を、簡潔にイメージとして形象化」したものであると述べる。(133) 旅行者については、「近代ヨーロッパの人道主義」を体現しているが、「さっさと逃げる」ことによって「人間としての決定から逃れる」(151)存在としている。(Sokel, Walter H.: *Franz Kafka. Tragik und Ironie*. Frankfurt a. M. 1976 [1964], bes. S. 117-153.)
- 12) アルトが、物語は「殺害の技術的な組織化」(484)を描いており、「ナチズムの犯罪を予感させる」(484)としているところや、なかなか動こうとしない旅行者に触れて、「中央ヨーロッパの法が持つ人道性が抽象的なモデルに堕しており、啓蒙の幽霊であることが明らかになる」(489)と述べているところなどから明らかである。Alt, a. a. O., S. 475-489.
- 13) 1916 年 10 月 11 日付のクルト・ヴォルフ宛の手紙。Kafka, Franz: *Briefe 1914-1917*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Frankfurt a. M. 2005, S. 253.
- 14) 1914 年 9 月 13 日の日記。Kafka, Franz: *Tagebücher*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley, Frankfurt a. M. 1990, S. 677.
- 15) Politzer, a. a. O., S. 175.

- 16) Kremer, Detlef: Kafka. *Die Erotik des Schreibens. Schreiben als Lebensentzug*. 2. erw. Aufl., Bodenheim 1998 [1989], bes. S. 143-152.
- 17) Ebd., S. 146.
- 18) Anderson, Mark M.: *Kafka's clothes. Ornament and Aestheticism in the Habsburg Fin de Siècle*. Oxford University Press 1992, S. 173-193.
- 19) Ebd., S. 300.
- 20) Alt, a. a. O., S. 486.
- 21) カフカは、1912年11月7日付のフェリーツェ宛の手紙で、「私は今日のうちに(……)小さな物語を書くつもりですが、それは私がベッドで悲嘆にくれているときに思いついたもので、私の心を圧迫しているのです」と書いている。(Kafka, Franz: *Briefe 1900-1912*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Frankfurt a. M. 1999, S. 241.)
- 22) Politzer, a. a. O., S. 175.
- 23) Anderson, a. a. O., S. 187.
- 24) 1913年8月21日の日記。Kafka, *Tagebücher*, a. a. O., S. 579.
- 25) 1920年10月29日と推定されるミレナ宛の手紙。Kafka, Franz: *Briefe 1918-1920*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Frankfurt a. M. 2013, S. 365.
- 26) Ebd., S. 364f.
- 27) 1920年11月3日に書かれたと推定されるミレナ宛の手紙。Ebd., S. 366.
- 28) Anderson, a. a. O., S. 187.
- 29) 1912年9月23日の日記。Kafka, *Tagebücher*, a. a. O., S. 460f.
- 30) 1912年9月23日の日記。Kafka, *Tagebücher*, a. a. O., S. 460.
- 31) たとえば、『変身』を書き始めて数日後、フェリーツェに宛てて、「それ(=『変身』)は静寂の中でもっと長い物語に成長し始めています」(1912年11月23日)と書いている。最初から全体を構想していたわけではないのである。Kafka, *Briefe 1900-1912*, a. a. O., S. 255.
- 32) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt a. M. 1992, S. 151.
- 33) Ebd., S. 151f.
- 34) Ebd., S. 155.
- 35) Ebd., S. 156.
- 36) この判決文について、ゾーケルも、「彼の『体に』書かれることになるのは、権力への無条件の服従、絶対的な従属なのである」と述べている。Sokel, a. a. O., S. 125.
- 37) 1920年8月28日付のミレナ宛の手紙。Kafka, *Briefe 1918-1920*, a. a. O., S. 323.
- 38) 1914年11月1日と2日に書かれたと推定されるフェリーツェ宛の手紙。Kafka, *Briefe 1914-1917*, a. a. O., S. 107.
- 39) Ebd., S. 110.
- 40) たとえばポリツァーは、処刑機械を「物語の本当の主人公 (ihr wahrhafter Held)」(Politzer, a. a. O., S. 166), 「真の主人公 (der wahre Held)」(ebd., S. 190)と呼んでいる。また、ゾーケルは、士官を「中心人物 (Hauptgestalt)」(Sokel, a. a. O., S. 136)と見ている。旅行者が「主人公 (Held)」ではないのは、「運命に苦しむ」(ebd., S. 137) ことがないからである。なお、インゲボルク・ヘーネルは、士官と旅行者の両者を「主人公 (Hauptperson)」(S. 483)としている。Henel, Ingeborg: *Kafkas In der Strafkolonie*. Form, Sinn und Stellung der Erzählung im Gesamtwerk. In: Vincent J. Günther, Helmut Koopmann, Peter Pütz, Hans Joachim Schrimpf (Hrsg.): *Untersuchungen zur Literatur als Geschichte. Festschrift für Benno von Wiese*. Berlin 1973, S. 480-504.

Kafkas *In der Strafkolonie* (1)

— Die Negation des 'Schreibens' —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

In dieser Arbeit wird Kafkas *In der Strafkolonie* untersucht und, gestützt auf biografische Tatsachen, als innerliches Drama gedeutet.

Im Mittelpunkt steht die Hinrichtung, die mit dem eigenen Schreiben analogisiert wird; als Hinrichtungsapparat fungiert die Schreibfeder. Kafkas Selbstreferenz hat einen dreifachen Bezug: Er identifiziert sich nicht nur mit dem zum Tod Verurteilten, sondern auch mit dem Vollzugsoffizier und er identifiziert sich mit dem Forschungsreisenden, dem Beobachter der Hinrichtung. Letzterer gilt ihm als neutrale Instanz, die sein Schreiben objektiv zu beurteilen vermag. Die Hinrichtung erscheint von daher als eine von einem "Dritten" beobachtete Selbsttötung, ein Vorgang, der kausal auf Kafkas frühe Traumatisierung durch den in dominanten, autoritären Vater verweist, der in der Erzählung als der alte Kommandant bezeichnet wird.

【Key words】 Selbsthinrichtung, Trauma, Vater-Sohn-Verhältnis